特42
424

弓術手引 上

255
144

075172-000-4

特42-424

弓術手引

甲斐　元太郎／編

M41
CEM-0073

神農氏肖像

特42
424

一編者は柳生流動を本とし時あり弓矢を兼ぬ書こゝに我流とゆゑれば危険甚多きを以て味至て正しく終身善良の射手たらんを願ふ

特許庁
41 6 24
内交

一神庭先生に従ひ竹林派の射法を学ぶ側ち弓術一定の書を編き事ら巻業にて拙者の目的に向ひ日暮きの危険を排し興味漸く多きを覚ゆるに至れり

一編者云弓術一定の系先生か常に初学者を教へ遂すく々條覚にして先生に求むれは借覧を請字を相叶ひ至極便利なること尽る頻

術道に関する良書其物を以て先生の手限り
埋没するを遺憾に堪へざるなり
一編者相馬先生に関し幾度か遂に懇請を汚して
彼の覚書を編輯し先生の検閲に供せり先生
自ら弓術手引と銘け是れに序文を附せら
れたり
一編者茲に素志を達したれは弓術手引を廣
く公布し凡弓射る者の便を図らんと欲する
なり

弓術手引序

余天保十二年十二月四番内藩に産る拾五歳
の時同藩師範彼関先生無敵流弓術先生に入
門し日夜流竹林派の射術を学ひ刻苦
勉励第四の星霜を経る先生年老長子
弓和清藩命に依り代て師範役となれり祝
杯を挙ると同時に先師の門に在るもの清先生
と師弟の交りを結へり文久三年三月先生余に授

るに竹林派射術深志之輒行有年依之流儀之弓書令相傳候猶射学裏長之上百為可者也との免状を以てす慶応一年五月余藩命により先生の勧手となれり即ち先生を勧けて教授の任に当れり而して藩藩置縣に除し余和歌に依奉し弓矢を廃する迄既に三十有余年に及へり

明治三十六年我縣大日本武徳會大分支部を設け弓術部を置かる同年五月時の支部長大久保利武閣下より余に弓術教師を嘱託せられたり

明治三十七年五月余大分支部の命を奉し第九回大日本武徳祭の演武に列し射術を試みたり

伏見鎮護宮殿下より証状を賜はれり

天皇弓法に射形射礼の二儀あり射形を内傳とし射礼を外傳と号す此の傳に関する書巻其奥旨深遠殊に口傳に係るもの多し余武子方に對し

是れを解示するの技藝に達せず然りとして
弓術を増加し余か一種手にては教授周到ならず
益々於て独習即達の便を教授の一体を要する
為免書案中より通常の射形射礼並射具の一班
を摘出し是れに両先生より教授せられたるものを
綜合し覧書を作れり今回弓術の求免に応じ彼
の免状なるものを弓術手引と銘打て廣布する事と
せり希くは斯道に志すの諸君実地に試み給はは
幸甚

二

凡は我派に取りては初学者か
階梯なれは一応は必ず履行すへきものなり然れ
とも弓書全体より見る時は僅少部分に属す
摘弓術の技術進捗に従ひ弓出編纂し倍々
便益を多へ保て手引の欠漏を補わんと欲す

戊申初夏

神屋端撰述書

弓術口引目錄

第一緒言
第二射具
一大弓之事
一握革捲樣之事
一弓弦之事
一的矢之事
一的塲之事
一天鼠革之事
第三射形
一五身七道之事
一五十十文字之事
一弓張自之事
一兩降握革之事
一弦卷之事
一鞲之事
一的之事
一父母天三ヶ云事
一殘心之事
一四ヶ之傳之事
一着已着見之事
一重之事
一腕力之事
一息合之事
一強弱之事
一耶正之事
一始中終法度次第ノ事
一弦切ヶ之事
一手之裏之事
一五部之詰五緩之事
一一分三見之事
一轄之事
一延之事
一上重弥之事
一騒静之事
一軽重之事
一諸用方弦鳴リ之事
一早番ヶ之事
一矢こぼれ之事

一弓取落之事　一矢代振様之事

第四射禮

一立射次第之事　一蹲踞射禮之事

第五巻藁

一巻藁拵様之事

弓術百引

第一緒言

三躰父母より伸び剛なるべくして我が力にあらず弱なるべくして我が恥にあらず唯剛弱を論ずるのみ学問の根源の如し縦水火を生ずる金鉄力刃を生ずるの如し剛者剛弱者弱とおのれの分に甘けつる性心を知て剛者剛を尚ぶべし弱者弱を重て師の恩教を信て剛を猶ます弱を海ます正直を神とし法度に任せ心慮に従ひ偽りなき道に愚にして異流に驚く事勿れと云爾

父母の四時弓に向たてまつる事を慎み
大形の心の行はるまゝ
月をひ新く人をうれき
仰の心動く驚く人の心こゝろ
学のひ時少けす弓の初末

第二射具

一大弓之事 夫弓の長さは七尺五寸本儀也然れ
ども射手に依り矢束に從ひ長短あり本末一丈
五尺の弓を七尺五寸にたすす事は天地の二弓なり
かをは天の弓に末をは地の弓となし云れは七尺五
寸は七徳五行にたとへしなり也
凡弓の制作に幾種あり茲には射者の為め
心用を感ずる者は指く戎狄式に用るの一を示せは
繩形弓是也則三所藤の素弓なり式に云上の藤
を月輪巻と云下の藤を白輪巻と云中藤を神の藤
と銘く天地神の三を表す也

一弓張良之事 夫張良と云は七尺四寸の弓は五寸一
歩位七尺二寸の弓は四寸八歩位一に惣良能く握
り下少し強心なるを持夫良と云ひ是を持矢に用ゐ
二に惣良能く握り少し強手を射拔き堅物に用ゐ三は

本末握りとに恰合紙きを的前巻藁手際物に
用ふる也

一握革捲様之事 握革は外竹の内角に巻き始め
外竹の外の方にて留るなり

一両降握革之事 傳に方て養の皮を二陽子にして夫れ
を彩にして握りに附るとあるなり 然れども全体
握りは弓の篭り鎖把にて多く物なれは革を巻
くに及はす殊に捍る為に縅之裏鞦なれはさして握
革には及ましと師傳也

一弓弦之事 我流重藤の弓には篭り弦を用ひ素
弓には篭り弦をかけす素の弦を用ふなり

弦緒は上弦は赤黄色の糸を用ひ本弦は黒糸なし
弦に九寸五分と云ふ事なり上四寸下二寸中間三寸五分
なり

一弦巻之事 弦巻は糸藤にて作る是に替弦を巻
くなり但弦は二分ましし巻き弦袋に入るる也
弦巻に弦を巻く時は本弦の方をまくなり逆の
方を弦にかくるに然きなり

一的矢の事 是は常に稽古に用ふる矢の拵様なり
凡二尺八寸位の矢束先ッ六歩位の弓に用ふには
大鏃
刄 六刄五分 篦廻り小一寸 篦一文字

羽の長サ羽づまり五寸餘
羽幅四歩半位也但し板附共重サ七匁位
亦曰拵普古修練の為にかゝる矢をこのむには、うき、
す篦を用ヒ
篦廻り九歩、匁四匁　羽長サ五寸二歩
羽幅二歩半位也
篦は杉形を用ひ此矢は矢早にて矢のさへ、まろし
然れども放れのむらを詰めるものなり常の修切
には、まろしき事多し
的矢は又は節をも塗り皮目をも付け目墨にもし樹
ひ篦にすることも可なり

的矢の篦は四節のものにて羽中、ラットリ、篦中射
着の節を云ひ羽は三羽にてヤリ羽、外掛、弓摺と
云ふなり
的矢一手を兄矢オ矢と名く尤も矢を番ひたる時
羽の外向なるを兄矢と云内向なるを才矢と云ふ是
を一手ノと云なり
的矢は凡三寸より少く持ッては出ぬものなり軽く
重く太く持ッへし日により時により射心替るもの
なれはなり
凡篦竹は三年目に切るものにて就中石地に生た
るを最上とす其竹は竹の生堅く竹の肉厚し節

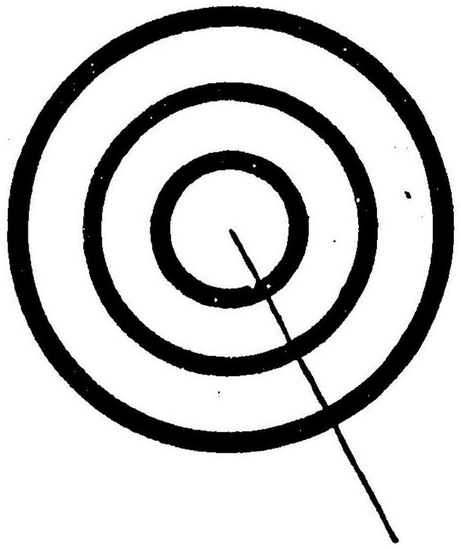
の間むらなくして竹の筋直也
うきす竹と云は五月に生たる竹を翌年の正月に切
りたる竹なり竹の生国堅まるすして竹の生種きもの
なり

一鞠之事　一具鞠なり　通俗鞠と云
紐の色は人々のうまれにより〳〵し紐の留メ方は式に
蜻蛉留メを用ゆるなり

一的場之事　的場の間は大体弓構より十五間又
は十二間に定むる也
採の寸法は素より一定の法あるも的場の廣狭に
より又は其所相応に取計ひ結ぶべしとの師傳也

一的之事　的の寸法は古来六寸八寸一尺二寸と定む也
星は六寸なれは表やの目に一ツ附るべし八寸には輪二ツ
附るなり一尺二寸には三ツ附る何も的の大サ三分の一
黒見にすべし一尺二寸的には三ツ目の外輪は広きはに
成るなり外輪は差渡し一尺になる六寸の的は黒輪大サ
一寸八寸の的は内の黒見八歩外の黒見五歩一尺二寸的は
内の黒見一寸二ツ目五歩三ツ目五歩此割にて一尺二寸
にて四寸黒見に成る恰合也
但し的の裏には敵の名く鬼の字を書くべし
金的は星揚又へ射揚と云て尺二等の的を射なる後射
ても可きものなり其寸法は一寸八歩也裏にはかりかゝ祢を

畫ヶとの教なり



真星と云
平星とも云

此の真の星とは我が心の星、引はゝへきなり惣曲輪を取
と云ふ的表の惣名なり
一天嵐革の事　全体天嵐を用ゐには弟に絃に引に
限らず若し矢疵を受し時山鶴の羽を黒焼きにして
天嵐に練り交ぜて疵口にぬくれはすし亦矢の羽

浮きたる時天嵐を和らめて附る也
革の寸法は竪一寸六歩横二寸八歩級一尺二寸なり

第三射形

一五身七道之事

五身

揖る身　退く身　伏す身　返る身　直る身
右五ツを一ツ付て教を成といくとも平老四ツを捨て
常に歩む形の様に当たる身成りを用ゐるといふ義也

七道

足踏　胴造　弓構　打越　引取　會離

足蹈者左の大指の頭を中物の真中に切て扇五六間拔らきたる地紙の合好程に心得浮処なき様に足の拇指を引延し膝の節を後へ押曲し胴造は足蹈二つの間跟と爪先の真中に胸筋なる様に左右の妻肩すわり腰にて少し反り胸は丞に筋骨勿論立に立て弓構は本弦を膝に立矢と弓と拳との間に頭指の中節を中物の真中に据き延ひす縮ます大様に有る事

打越は手の裏を定め肩の高下を考へ弓懐弦道の是非を分別して弓は陸へあけら心持にて

勝手へはゝく受延して打越麻縄なれは全部赤かたし引敷に筋骨延やかに心を鎮め目中に随い恰合高下分別有る事

會は弦と筈と和速なき様に其矢筈の下へ大指を一文字に入れ弦と指との筋違ぬ様に掛けて二つの指を弦ふ弦くひ下に受くべし

離は射形と中りの矢事物指也勝手に有り手先に有り物射に有り第一もぐそ放れすと云心を嫌う

一五十十文字の事

弓と矢　會と弦　弓と手の裏

胴の骨と肩　首の骨と矢

一父母大之と云ふ事

撓母　剛　父　撓母は勝手也　剛父は押手也

大之と云は押大目引三分一と引合の味を云、結るに
よつて矢を子と云て父母思い合て鈎り合よし
放れは子の矢高く汗流り合ふれはむら有べし

一手の裏の事

不居附　不浮　反々　まぐれす

と見へたり手の内悪しけれは無身筋骨不直にし
て離れの前後浮沈弓すわらす押味か上過れは
下弱く前過れは後弱くたり四方弱りたり真中に
受くべし

一残心の事

打越す時に押手を左右の肩に引合
い弓に連れ浮かす想身をすべる是也金弓
を引く時身を沈ては叶はぬ

一五部の詰五段の事

左肩　陽詰　押手　胸
右肩　陰詰　勝手

引収めて骨法を静めるに叶ふ五ッ所を詰め気
配り洞既ふ寄るなり一ッ所洞既すれは悪
流みに有る也

一四ヶ之傳の事

弓力　弓盛　弓斗　弓拍子

弓力とは我が力に応せし弓を用い決して餘力の弓を好む事なかれ

弓盛とは抱の内我が氣力筋骨くたびれす鈎り合盛んなる處にて離すべきを云但弓にもよるべし射剛れたる盛なる弓を吉とし多く射あるは悪しきなり

弓斗とは弦の裏捻り詰めす引収めて つり合ふときに弓におさせ弦の内へ志ちを受け志ちなく邪なく弓返りすること也

弓拍子とは餘力の弓に軽矢弱弓に大弦の類なり

強て鈎り合の悪しき道具に異ふ用べ有る弓の張り具にすり善悪の相を有るべし

一一分三界の事

界的の項参看の字は的の異名にはたらく一分とは鏃をみたり一分と云ふ所を基づくしては三界に外れたること云ふ義乙

分れ目前の規矩むらふの金に応ずるとのるべく我が心に星あり巻に有り亦人々の心清たる目のかゝあり巻すり的を前に見あて見下し見直し其の人の覚へ清たる曲尺是器の前の星と目前の星を先の星へ見伸ら合と云ふ乙

一着己着眼の事

矢先の星を一寸前へ移し己れに体くを着己と云ふ己れ眼にとまり的に引はられたるを着眼と云ふ心を矢先に移すこと己に付け的をたすきに掛れは寸一寸前に止勢之

一轄之事　是は矢束に用ゐる義之五躰の骨行に有り初心の時はいかゝとも矢をひかせて縫目かにそだて骨相筋道の調ゐるに志さかつて身のたけに応ゐる也亦左なれの轄者四方へしだけて志ゐるゆゑ有心那是二つのしさびとは是也

一重の事　姿中強の三身共に行雲の強身也一大多

多深くし是踏を定むるより其心に到るそ打越の時に殘身と云ふも此事也

一延之事　五躰と陸を延可謂殘ゝ才一志胸より首筋にあゐ行要之肩にあり手先に居り傍手に有り能々修業すべし

一腕力之事　是に口傳有り引収めて沈む先を肩の後の沈む骨の下へ落るにあり左り沈むも又下りたるも悪し公れ共初心の射手矢束の引けぬにはひたを少し下けさせても たゞ と沈かせて後に恰合の強身におさむ角し左あるものまへに五緩の外と矢先の緩ゆは腕力の不足に居る也

矢束不と引とあちかへ心あり

絃かゝる色所 ゑびらの力 よ

矢束不と引とゝゐる初手の大事と先條の骨相筋

道にのびゝくちくまらされとあるめく初心の時に分

限りうちだにひけば筋成りかたきにうけてな

り臂の身力も拭をかりにてなしゑびらのちから弦

をくて引と京心なり

一上重於之事 是は稽古の収りに二のうでゝすもふ

うでの骨を上へ重ねていふうでのふとき所の肉と

筋を沙汰りかけたる強味也

一息相之事 息相は離れの前抱の肉なり目中に

從ふ拍子なり時にまりるなれば有るに8無きに

定まらぬ

息相は情りの道の中なれや

有無の二つは目当に拵ある

是息込にあるなり息込とは息の無きに極なり

我派此の息込を嫌ふなり息込に五つの拵あり一つには

若くして骨延ひす二つには重行すして上重し三つ

には世事上げて筋張る四つには物云ふ事叶はれは声は

た不直なり五つには修羅にして強身なし此の如

くの分別を知すして息込を為ゝとする8のあり

法ゝ先條の重と延ゝ五部の法を肝要とすなり

一騎靜之事　騎靜とはきわぐと去づかとの儀にて身骨義心とともに靜かならねば尋常の形まなきものなり弥更中りは弓の神弓の本地なる故騎しくしては叶いさるなり心の騎靜は七情を去て寂と小法師になるべし先心より靜まらねば弓は収まらぬものゆえ身骨の騎くと云は骨法を拵へ兼て収まらざるなり

一強弱之事　射形の美あるゆに強弱と云事は弓手に有り馬手に有り手裏に有り會に有り總躰に者因に中りを窺ふ肝要は弓に押されず弓にもたれぬ樣になすを強とす弱は骨法のゆまれざるを云なり云れ共中りを行ふ是には弓の強弱を分とす弓の強弱と云に種々あれ共就中中りに餘力の弓を好むは小豆を招くものなり矢の強弱を分て中り外れの実否を窺奇し矢にすりて前まれ後まれするを有會心の弓らざる人は日裏日表と云心を分て内竹、板付を引越して弓にて矢を称たすに依て前きれするゆあり

一軽重之事　的矢は常の誓古には大形淳巣竹を用るも此の矢は一尺をきぶふものなれは定うきすに軽あり矢の根笹の撓合は板付をすげて撓合せそれに根の方四寸軽き程の釣り合なれは切矢なきものなり弓の重きと軽きとに中りの不同ありと云ふ是は全躰

人に依るべし弦先の力なき射手は常に重き弓を好まざるに付弦て重き弓を以て射るに於ては弦先の下りて中心を中かたがるべし又弦前強く達者なる射手は軽き弓にては弦先驚きて悪きこと然を共指中八人迄は軽き弓を好むものなり

一邪正之事　射形の邪正は五身七道の部に歌したれは茲に解かす

弓はせると入ると直なるとを能く注意分別す可き也大躰弓のせたるは前へ矢行べし又弓の入りたるは後に行く但し分に応じ弦されは此の分別はなきものなり　的矢番う邪なるを好むもの無く

箭強く丸き箭を用ゆ可なり但し片浮巣細竹は射手の好にすべし

目当物は竪に長く細き物はよろを伏せ拾垣の形に押し当て射るなり横に長きものは弓を陸て撞なるべしに弓を十文字に当て射るなり最に一分三厘と云ふ是なり

的のつりたるは星下に見はるる色かけたるは星の上に目を付るべし前ひづみには星の後口にはけ後ひづみには前に目を付る也

的の輪より外へ矢の根せでたるは外れになる色輪の外より中りてる矢の根内へ入りたるは中りになる也

一諸用方弦鳴り之事　何も用ある時弓を射る事悪しきなり第一矢番に遅く又矢を取り落し若こぼれ等のるもあり或は矢づりと掛合もきこまらず射返して徳と云ふるもあり　他流には打切りと云て弦にて小脇の打脇所を打なり我か派是を嫌ふ子細は一度先のまくれて弱みなれば深く戒めて弦鳴と云也

一始中終法度次第之事　自師可到覚道也

第一中り弓の本地也修学鍛練の為す所にて七道より始めて其意趣を含む也

第二矢早（剛を専らとす）

第三　板矢（鉄知身）

第四遠矢（懸也　特遠弓とす）

第五花形心は清を行て義しく射る事也　凡弓勢古の人師を勢み教を受ふ人へとも法度を主体る事は稀なり人毎に巻墨等にて射形を拵古すを顧みす的を事とにすれば正面の義形に叶はす花形を対ふんすれは的に中すす云れば花形を専らにして第二中り第三矢早第四板矢第五遠矢とこそ定むべきなるも爰と花形を第五に書す是は草薙勝敷と云を以て なり

一早番と之事　諸用方の肝要也　たゞくみ又は若を持つ大事

矢番の方右きき方那〳〵有る方

一すべて心の静まるべき事

一先矢にて弦きれし時は後弓に少し体押し切れ弦
をのとゝく所にあらば取りて二ツ掛けに引けて弓に
取り添へて取り張り替へ替へを第矢を射る可し又は
切れ弦弓のとゝく所にあらは弓にて三度かき寄せと
りて三度引いて弓に取り添へて取る若し射矢にて弦
切れし時はふたくまを張り弓の外へ弓を右に取り肩
を入れて切れ弦はと近しなふは取りて二度に引け
て射る矢へ取り第矢なふは三度すきりて的に向
ひ体ねして取るべし走も蹲踞の射矢なふばれす

可かしに若し又切れ弦弓をとかぬ遠き所にあ
れば取りすして取る也

一矢こぼれる時は静かに弓矢取り引けて前へすきり
後弓に体押して的はづせと云可し其の時後弓を全
掌の者なれは弦に手を掛け体押して静にねそぐ
せと云少て前弓に射さしへし又材すり高位の人な
らばをけたる矢をさしたるして体拝すへし若し
答あと欲けをとゝへはく体拝して後弓射る可き也

一弓を取り落し矢をれる時はたとひ弦きれをとも
驚き強く庭かしに射矢なふば前に方すとふり

静かに肩を入れて倒れたる弓をとりあげて矢代ぶ
ど乱れいはゝ一えの如くきれ弦は弓に添ひ亀
一矢代の振り様は矢代を結くませて後へ廻し先ッ
袴むり一本取り出し矢の根を的の方へなし目通り
に差し上げ持て弓構の上の端に当て其次ぎ二本ッ
取り出し袴むりする一尺程間を隔て二本共生の間
少しおきて左ぶゝし其次後さに二本宛取り出し
矢を對長 に有る時は二本残るゝ是を下の端に
くゞし落ちと云又十五張七張かゞに有る時は袴むり
一本出しを注者其の後はちゃうと那らゝし其時は
袴むりばかりにて落ちは有るべからず

第四射禮

一立射次才之事
射手は射場定て出る時先ッ幕の内にて弓を張る
其時張り顔を能く見合せ強弱を分別して強き
方に左を掛け力を合せ身をかけすゝ付け押にて弦
三ッ五ッ五りて一ッ五り廻してかけるさて弱き所を
引立て強き過きたる所を押し其後出入を平素
引すゝ素引とは方一探の下を嗜ひ示し矢ぶり本
消を示し後ろにうらかぶらをくゝひ高めて一回して
うらうらもとゝ拾にて引き示し二度顔の通りぶり
少し引越してかぶらを落ちは又は弦打を三度

してかくるを落ち付かざる事も有り何れも弓を張り終れば射場と左し拾五張にても二拾張にても一同に立つべし出る時は第一圖の如く

弓を弓の握り を持ちうら弱を下げて少しかいま み矢を右手に板付を摘へて持つ可し其上覽の時は一人別に式の如く弓矢を置き諸礼拜して法くだひて一列に相並び一同右手を右の膝頭に置き合圖ヶ右の足より立て左の足より歩み射場に移り一同かくむと全時に第二圖の如く

いつく左ひて拾り弓一尺程上を妻手に取り左手を左の膝につき眼を的場の間又は目中物の耶所を見定めて第三圖の如く

兄矢弟矢を見別け兄矢を番に能く矢を番ふ時弓と矢の拵合の金物けは是れ中りに用ゐ肝要也兄矢をは

少し出静かに兄

用箆是敬に心を付

左の頸指にて脆と留

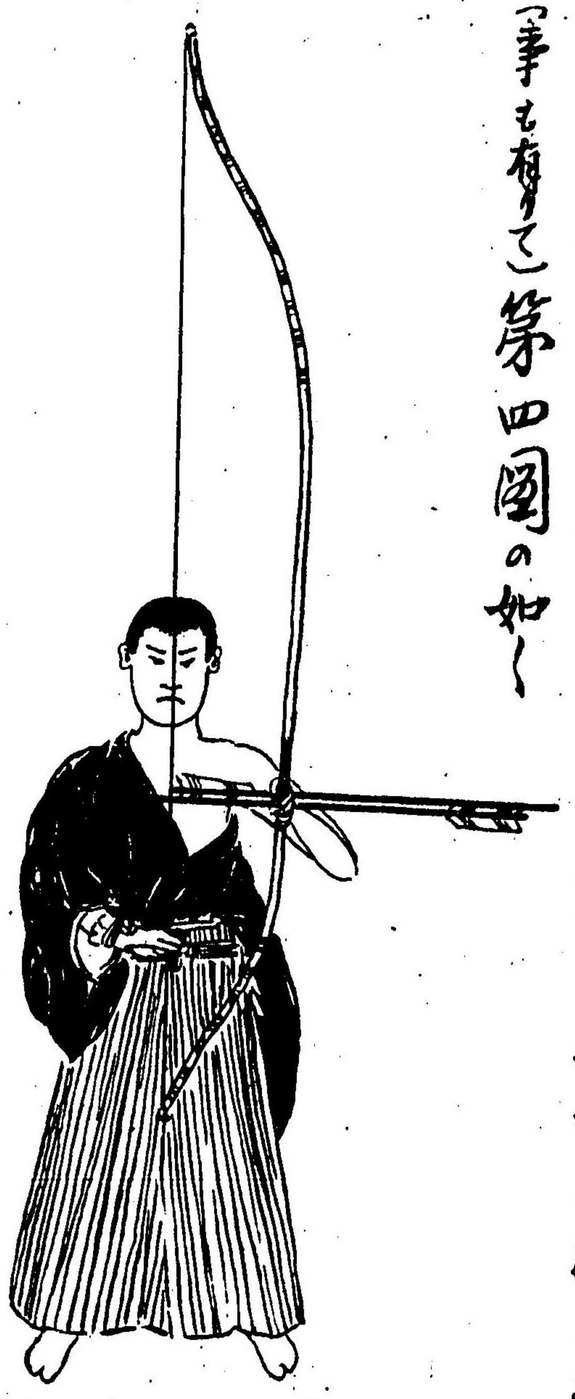
め弟矢をは左けたる矢の如くして矢尻を兄矢の筈の

方に二三寸出たる中指と薬指名指の宵に左きみて持ち

大後。近前弓の如く矢番を時静かに右の手にて弓弦

を持ち右こ足より主(此時一全主て前弓の射る宵弓構して待

事も有りて)第四図の如く

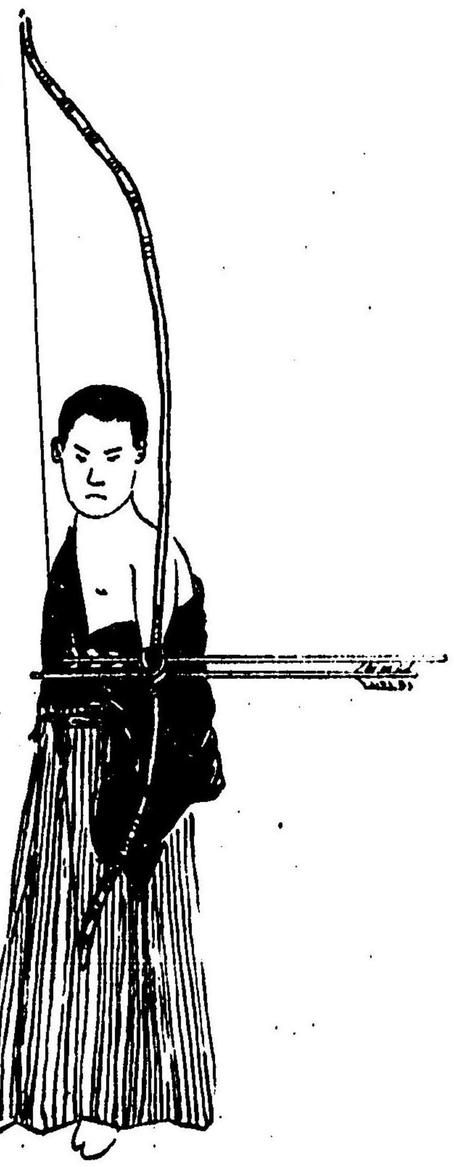


足踊及胴造を成す可し足踊は敬の如く左の足先と目中

物を見通し金を定め左の足は少も動かさす右の足を

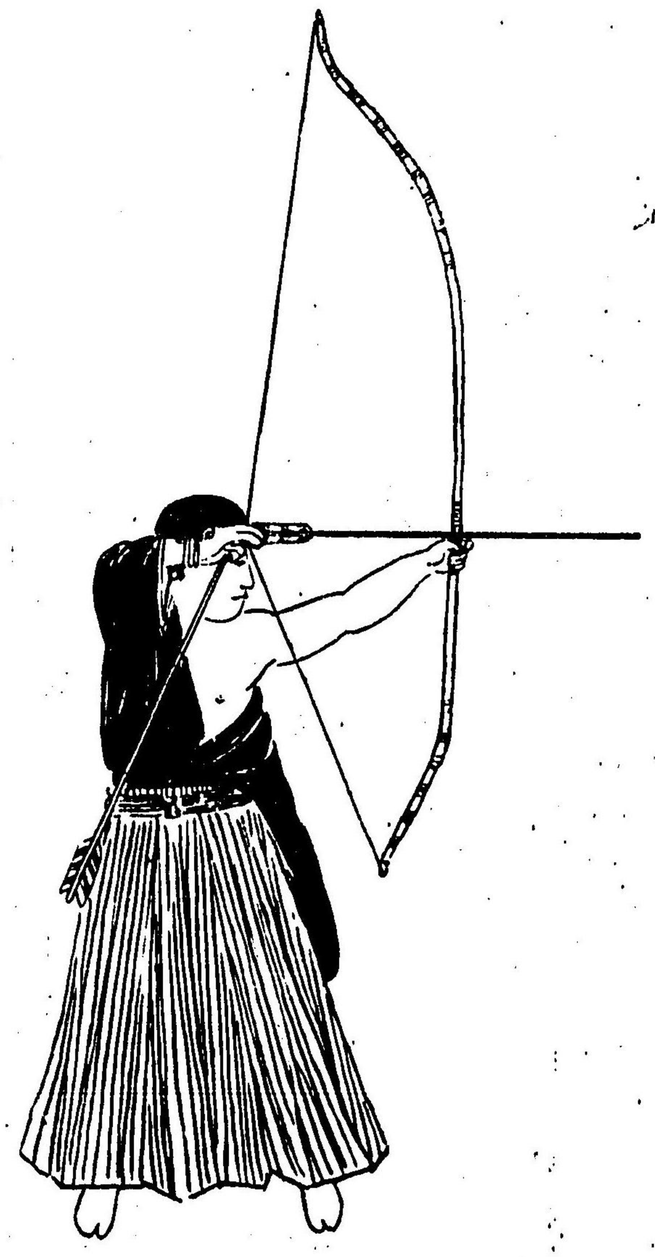
踏みて死き、廣さは其身の大小に寸骨法に従ふと雖も

大体矢尺の長サに踏み張きて踵と指先に力を入るべし
尤中りに肝要なるは目中と左の頭指と右の大指と瓜根
と三ッの金なり 太れは的に糸を引て大前に立ッと中に立
ッと踊留りに立ッにて直ッとひづみにて目中の相違あり
目中より我か立ち前へ墨縄を引く心持なるべし
胴造は教の如く心を緩やかに筋骨を延びやかに身成
を氣高く立ても居ても同し心持なる可し全体胴造
の金は揖らす退かす及らす居ます目中の真中にすわ
ると云ふ義にて能く金を定め左右の妻肩を足踏の地
縄に重て上中下三段を筋違わぬ様に為す可きも
斯の如く胴造して第五図の如く弓構を為すべし



弓構は教の如くにて胴造を整ふすべし 弓構の金に
墨指は身に従ふと云ふ事あり 大前と中に立ッと後に立
にて身の揖り地縄の引様大事なり
夫れより静かに元の構へに復し才矢を少し繰り出して
才矢まい指と弦指とに掛り(四ッ揖の時は小指にて掛る)夫れよ
り會は教の如く弦と大指の金を定め其時弦のあたる

所は大指の中の節と付根の節の真中にて弦を受く
心なり而して強と大指と筋遠き様に二つの指を結
て強く引下げて腕と同じく角し拳の付根に強弱あり
下へ打らしてる上へ過るも弱みなれは唯常に横な
るものを引く恰合なるべし
一文字の會は矢打すなをなり中りには餘り強會
を好まざる者なれは常會より弱を心掛し可し弦
掛みの強過る時は矢先の速ふるものなれは是亦常會
より弱き事
斯の如く弓構と會を強れは第六圖の如く
打越を為す為し



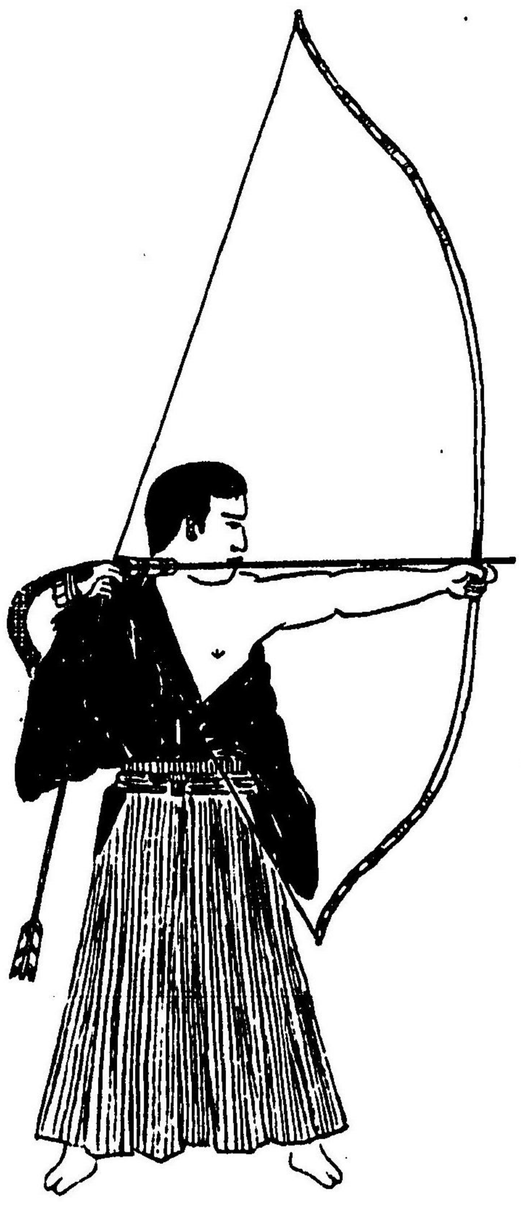
打越は鞍の如くして陸に弓を心持にて弓を向へ押すと
共に上筋を内へひ拵り返して弓を向へ突き出すと共な
に肩の次目より二の腕の肉筋迄も苦所なく押し掛け

躰は打越して見掛くるに巻目中を見て高下は場に寄り射手に依るべし

金躰弓を拵るに手の裏悪けれは怒身助骨不直にして離れの前後浮沈弓すわらす押味か上に過れは下弱く前に過ぬは場口弱く四方弱く真中に受くべし打越兼相なれは金部しかるべきなり

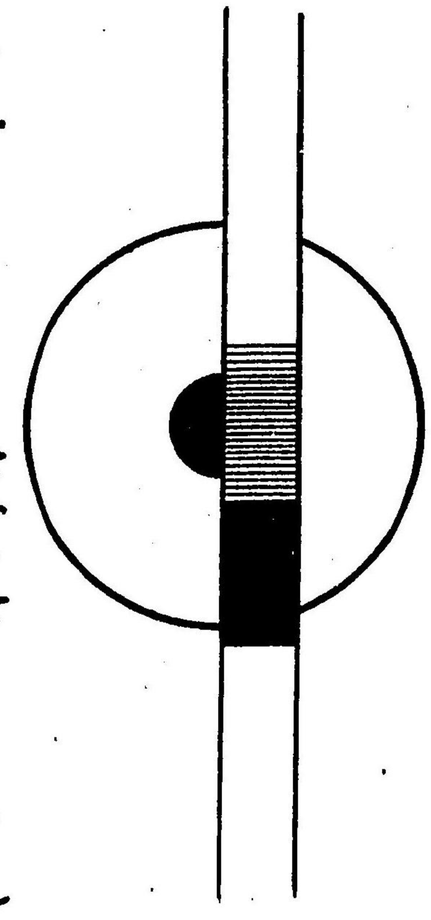
他く念を入れべきなり

斯の如く打越を為して引分すべし引分りは数の如くにして反搦又篇土成と云て高く引く仮に弓手は押しあてに押く卸し馬手は押すに後て弦を上に引くやしさて掛け巻の右の目通りを越ずして臂下りに付ケ形へむかと引くなり引収て才一ひくきをきふなり高過くるも悪く平付も云て肩に付き過るもいまむ外ケ付と云て肩より遠くなれて悪きに依て右肩の資の通りに巻と肩と上尋分を大体とす是を双の位と云なり其引収たる恰合第七図の如くにて



就中最も肝要なるは押手を通して其平なることと恰門の如くなるべしめて持つにあり猶前条の射形を修練完備して全体器械の如くなるを要す

的割を析して第八図の如く



弓の左側を的の中心に当てて矢摺藤にて遠近を斟酌し狙を定むべし狙ひ眞正なれば必ず的中せ

弓の強弱に従て其目的に外れ上下左右に矢の奔逸するは弓と強弱との撓合の全を得ざるものなり

是以て狙を真正に持ち(能く引て抱のうちの目あてこそ狙へ小法師なりけれ)との歌の意味を悟て離れへきなり

離れは中りに用る大事之儀手に有り手先に有り惣体に有り離れは弓を身に留るに能く其性自から離れたるを能とす必ず軽く左右に能て弓の上下左右に鋒り動かさず緩速やかに弓返りを為すべし

残派弓返して弓の動揺するを きろうに依て初学者に於ては最も戒し尤可きは未多其業の熟せざるに

強て弓返りを求むるに有り出るものたるわ早き技右熟練
其は自然に成るものなれは決して附焼刃の無理を為す可
からず斯く拙く離れて第九図の姿勢に陥る也

甚姿勢たるを射放なすに前の姿勢にかわらす押手と
撓手は不意の高下を生ずる恰合ふ〜鈎り合押手をば
少し後口に開きて弓の前より的の中りを見る如く右
素的に中るの射手は反くは五六寸位開きしとなり公
れは撓手と肩の開きを五六寸位とす
我派初學者に在ては全体を和らめ押手撓手を自
由なるし為る為め大放ちて技右するを者とす一旦
目を的に見付きてより離れて踏点目を他に散らすな
勿れ
前弓は右の敷を和守り先矢を射放して的の方に
向き左足より横延ニニ畳程すざり第十図の如く
つくまひて

弓のうち左ずを下けて矛矢を持ち右手を右の膝の
頭に付け謹みて拝る左より其次の弓数の如く兄矢を
射て的の方に向き左足より少すこし前弓に並べて拝
べし大後弓近兄矢を射放し前弓に准い居る時一同に
右の足より立ち左足より歩み射場に移りかゞむと

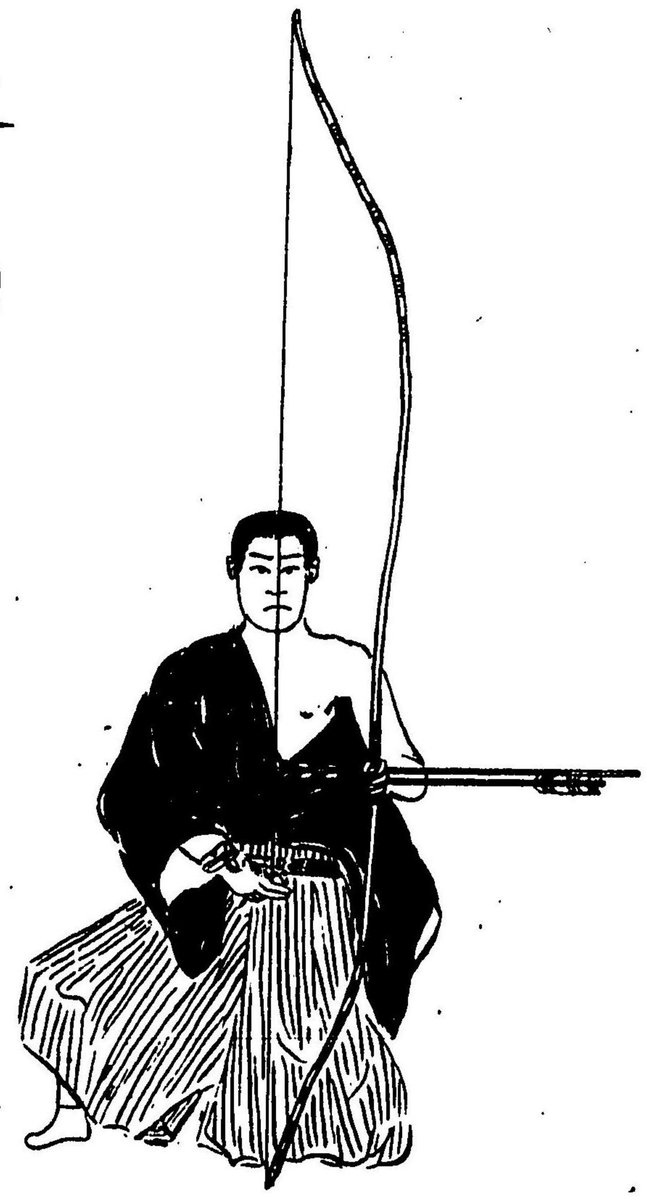
仝時に第十一図の如くし

右手の小指を弦にかけ前に引廻し前出第三
図以下の数に従い一仝静かに矛矢を番い少し見合せ
前弓より矛矢を吸々に射るべし前弓射仕舞ひ的
に向ひかゞむと共に弓を右に移り肩を入れ的に向ふと一
度に弓を弓手に持ち替へ右の足より立て左足より三
足すさり的に向ひ体拝しすさりて進みて拝て後弓

の射ちを待つ大後弓近前弓の如く余矢を射終りて前弓に準ひ扣を時後弓より先て幕の内へ入る也尤前弓か的に向ひ射扣する時後弓は弦に手を掛け少し射扣して是れに左する也

一蹲踞射（ツヽバイ）次第之事

つくばいを射る也扣五張に至る二扣張終りて一同出つべし出る時より端の作作は立射礼と相同きに付省略は詳記せず扱て一同に立て射場に移りふつくばいて弓を妻手に取り肩を抜き身縮ひて弓を手に取り少し見合せ矢うしろまて矢番ひる時前弓は妻手の膝を打て立第一図の如く

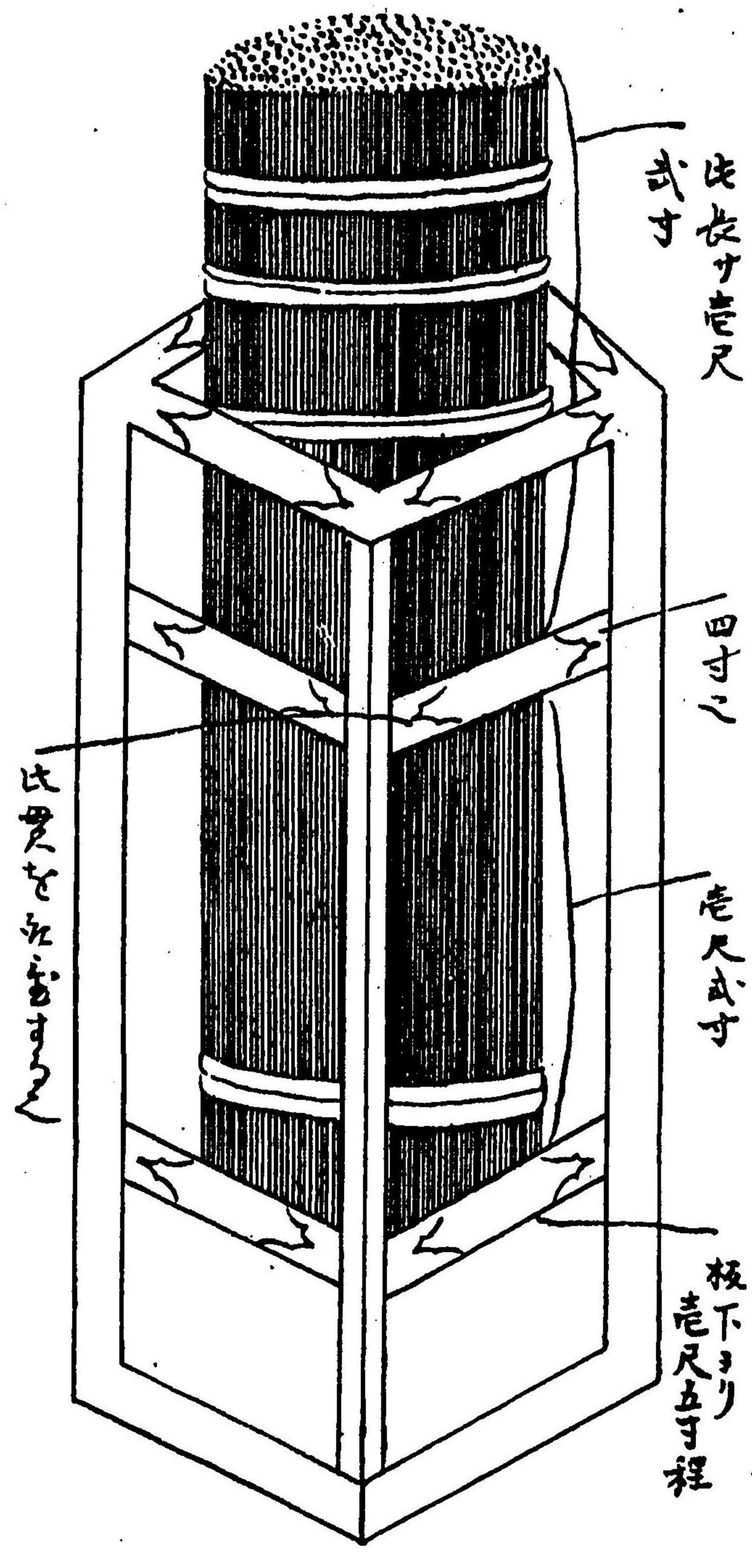


弓手の股より胸まてを真直くになして妻手の股をは金の手に踏み弓手の膝と馬手のくるぶしを金となすべし歌に（法くまいは弓手の膝と馬手の足れかくる即を金とまるべし）是れ踞に二ツの金なり

我派禹左の足を延ばして踏む事なきわうと
斯して三ッの金定まれば矢を少し出して取りて妻戸のひ
さき一束程右の方に金きり兄矢射たるすと矢を
取り膝を出して的の方に向い横進二三畳程すさり弓
のうら左づをさけ第矢を持ち右手を右の膝の頭につ
け進みてひかるる也其の次の弓今年く兄矢を射て前
弓に並び扣へ大後弓も兄矢を射て前弓に準
ひ居る時又一同にて射進に移る前弓すりつくたびて
第矢を射仕舞ふと沙さを出し弓を右に取りて肩
を入れ又弓を弓庭に取り却く右に足すり出たた
ら程にして射る也

私に云第矢射仕舞と膝を出して肩を入れ兄矢を
射て扣へを如く揖進二三畳程すさり進て扣へ
しる弓巳准て扣へを時一同に立て射る事も有又一
番弓射て射ると二番弓三番弓も一番弓に準ず
射る事もあり
巳流には弓四五張又は五五張もあれ次々に立て見
通りて兄矢を射て射る後弓も主の如く兄通りよ
り射て射る是に准て段々に兄矢を射残り拾張程
に成る時一番に立て兄矢を射終を地に立つ射れ
ものく踏付順々に第矢を射る也尤第矢射仕ま
いて的に向い伸ばする事前に全じ是れは異術也

一巻藁之度　巻藁の弩古は悠久囲碁の定石に
於けるに如く弥に初者に在ては心要欲く可か
らざる細也古来我が門に入る者はなるべかり　め此巻
藁にて弓の稽古を為し師の許を者什的に移る者
本旨とせり
然り然るを以て初学者に巻藁の稽古を勧免候
て、その稽古程をあらわし其便に供す
臺高サ弐尺八寸四歩前一寸下り也　然れ共是れは
人々の形に順すべし　肩の高サを定本とする也
横幅　弐尺四方也　然れとも射人初心により大小
は好次第也

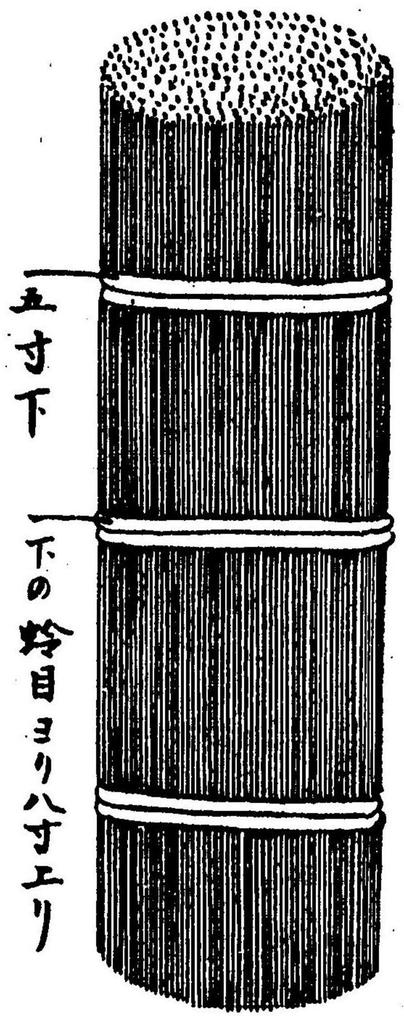


大サ　三寸三歩
幅四寸也　三寸にて多くし

巻藁巻

藁をすくつて藁を摘て一握づゝ結をして藁の穂の所にて打ちかゝへに金いくゝ川も大サ凡壱尺弐寸廻りに成る程にかさを重て三所かゝ結をして細引にて結くゝ志めるなり〆様は棒を十文字に打通て十文字の内へ藁を入れて十文字の角へ細引を付て左右に引ちかへて志めたなり藁を次第に志めるなり

巻藁縄三所也巻き藁縄なり其上をこもを巻縄にてのみ化粧に拵る也勿論己らの天地を切り揃る也



巻藁　長サ三尺

指渡　壱尺二寸廻り

上巻　化粧結三所

天より五寸下けて結志めて下より五寸上げて

結志めて下より志めて八寸より中結をする

明治四拾壱年五月廿日印刷
仝　年六月拾八日發行

編輯兼發行人　大分縣速見郡別府町　甲斐元太郎

印刷人　仝縣仝郡仝町　荷宮綱太郎

印刷所　仝縣仝郡仝町　石版印刷 鋼板彫刻所　山本工美館

誤	正
(五丁天三ハ大三ノ誤リ)(六丁今トニノ間ニ(々)ヲ脱ス)(六丁正直ノ下ノトハ(を)ノ誤リ)(八丁弩弦ハ(替弦)ノ誤リ)(九丁掇のハ埒のノ誤リ)的場ハ(射場)ノ誤リ)(十一丁直トラノ間ニ(な)ヲ脱ス)返るハ(反る)ノ誤リ)(十四丁多ト射ノ間ノ(ニ)ヲ刪ル)(十六丁是ニハ(支ニ)ノ誤リ)(十七丁會ハ(會ニ)ノ誤リ)淳巣ハ(浮巣)ノ誤リ)(十七丁是ハハ(支ハ)ノ誤リ)(十八丁是なハ(支な)ノ誤リ)十八丁つりハ(とり)ノ誤リ)十九丁是ハハ(支ハ)ノ誤リ)(二十丁ハ得ハ(矢ハ)ノ誤リ)(二十丁後トハ間ニ(と)ヲ脱ス)(二十一丁てと弟トノ間ニ(肌を脱き)ノ四字挿入ス)(二十二丁耶正ハ(郡正)ノ誤リ)(二十三丁てノ下ノ(〇)ハてノ上ノ誤リ)(二十四丁半會ハ(半念)ノ誤リ)(二十六丁恰ト門ノ間ニ(も)ヲ脱ス)(二十八丁右手ハ(拔手)ノ誤リ)(三十丁右手ハ(拔手)ノ誤リ)(三十一丁心要ハ(必要)誤リ	

[illegible]

用藥

255
144